

地域の底力——香川県三豊市

自立した民間の活動と 行政の支援姿勢が導く 香川県三豊市の未来

官民がそれぞれ独自にあらたな流れを生み、
スピードに進化し続ける香川県三豊市。
人の心をつなげるさまざまなコミュニティが、
先駆的なその活動の礎となる。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

香川県三豊市西部、瀬戸内海に面した仁尾町の「父母ヶ浜」は約1kmにわたり続く砂浜。砂地の潮だまりに景色や人がくっきりと映る写真がSNSで大きな注目を集めたことがきっかけになり、現在は多くの観光客が訪れる。

一枚の写真が 大きく変えた 三豊市の人の流れ

香川県西部に位置する三豊市は、旧三豊郡の七つの町だった高瀬町、山本町、三野町、豊中町、詫間町、仁尾町、財田町の合併により二〇〇六年に誕生した。現在の人口は約六万人を数える。



「合併で何かが大きく変わったわけではなく、住民の皆さんにとっては『行政区域が郡から市になっただけ』という感覚だったと思います。一方で自分の中には長年、『この地域には飛躍できる要素があるのになぜ種をまかないのか』という疑問がありました」

そう語るのは、二〇一七年から市長を務める山下昭史氏。高松市に本社がある地方放送局報道部で勤務の後、県議会議員を約六年間務めた経歴を持つ。

そんな三豊市に大きな変化をもたらしたのは西部、瀬戸内海に面した父母ヶ浜だった。

「市の観光交流局の職員が着目し

た写真は、潮だまりが鏡のように人や背景を映しているもので、SNSに投稿したところ、南米ボリビアのウユニ塩湖のようだと話題になりました。その結果、かつては年間五〇〇〇人程度だった父母ヶ浜への来訪者が二〇一七年ごろから増えだし、現在は年間約五〇〇万人の観光客で賑わっています」

その賑わいだけに頼ることなく、

山下氏は就任以降、種をまき続けている。その一つが二〇一九年に立ち上げた、東京大学大学院教授・松尾豊氏（注1）のサテライト研究室「MAiZM」。AI研究の第一人者として広く知られる松尾氏は香川県出身で、山下氏とは高校の



「全体を俯瞰して物事を進めつつ、マイノリティーにもきちんと向き合うのが行政の役割。例えば教育においても、先端に行くAI教育だけではなく他の選択肢も設けたい」と話す市長の山下昭史氏。2022年、三豊市では義務教育を終えられなかった市民のために香川県初の公立夜間中学を開校した。

「地域の課題解決は、新規ビジネスにつながる可能性が高い。共にあたらしい仕組みを考えましょう」というスタンスで、民間企業約



三豊市高瀬町で栽培されている高瀬茶の生産発祥の地。その生産量は香川県の八割を占める。

同窓生だったという縁がある。

「MAiZMの大きな柱は、高等専門学校を中心としたAIの人材育成です。通信や電子、情報系に関する技術や知識を学ぶ高専の学生たちが即戦力であることに着目しました。実際に、高専の学生によるベンチャー企業が三社起業しています」

その裾野を広げるために小学校でもプログラミング教室が行われているほか、中小企業や地域の課題についてAIを活用して分析し、解決策を探る取り組みが進められている。

（注1）松尾氏については、広報誌「にちぎん」2021年春号「インタビュー」に記事を掲載しております。



潮だまりの水面が鏡のように周囲を映し出す父母ヶ浜は、とりわけ夕刻に多くの人で賑わい、周辺にはカフェやお土産店などが軒を連ねる。1990年代、父母ヶ浜は汚染が問題になり埋め立ての計画が進められていたが、ボランティア団体「ちちぶの会」の清掃活動により美しい浜がよみがえった。



三〇社と連携しています。企業にとっては新機軸のサービスや商品が生まれる機会になり、三豊市にとってはその果実をもらえるという利点がある。実際、企業との連携によるAIの分析をもとに、データサービスの送迎の効率化等を実現しました」

MAI Z Mに関する活動のほか

にも、STEAM教育（注2）や市庁舎内のDXを推進するなど、デジタル化に積極的な三豊市だが、その一方で山下氏は職員とのコミュニケーションにも時間を割く。

「新規プロジェクトなど、現場の担当者を含めた小規模なミーティングを頻繁に行っています。情報が日々更新されるマスメディアの世界にいた自分にとって、行政の慣例は驚くことが多く、やり方を改めてもらったものもあります。例えば会議ごとの資料作成の軽減とペーパーレス化を進めたり、プロジェクトの推進のために全庁的なタスクフォースを立ち上げたりと、スピード感や柔軟性を持った意識の共有を図っています」

活発な動きは行政だけではなく民間にも見られ、それが移住者の増加にもつながっている。

「移住者と元からの地域住民が非常にうまく融合しているのが、今の三豊市の大きな特徴です。互いに徹底的に話し合った上で動き、自走しているのです。余計なことをしないのが行政の方針。補助金でのサポートではなく、規制緩和のような政策で後押ししています」

暮らしに 楽しみをもたらす コミュニティづくり

山下氏が話す自走者のひとり、仁尾町で生まれ育った今川宗一郎氏。長年地域で親しまれてきた「ショッピングストア今川」の三代目を担う。

「二〇代後半が転機でした。かつて私は、スーパーマーケットは地域の暮らしを支えていると思っていました。しかし、そうではなく、逆に地域に支えられてきたからこ

そ営みを続けられていることに気が付き、恩返しを考え始めたんです」
二〇一五年、今川氏はその第一歩として、廃業する事業者の後ろ継ぐ形で離島への移動販売を手掛けるようになった。

「離島に住む高齢者の方たちは自分の目で見えて物を買いたいし、買物の場はコミュニティにも
ゴミを増やさないことに配慮した、宗一郎珈琲のステンレス製のカップは全五色。赤なら「もっときれいな浜になってほしい」、黒なら「夜を楽しむ場所が欲しい」など、色の選択により三豊市への要望を伝えられる仕組みになっており、注文の際には会話が弾む効果も生まれる。

「コロナ禍で活動が制限された期間は、地元の仲間と集まる機会が増え、より深い信頼関係が築けました」と話す今川宗一郎氏。宗一郎珈琲のスタンドは、今川氏の似顔絵が目玉を引く。



（注2）STEAM / Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学・ものづくり）、Art（芸術・リベラルアーツ）、Mathematics（数学）の頭文字。教科横断的な学習により実社会での問題発見・解決を目指す教育方法。

仁尾町には3軒のスーパーマーケットがあったが、現在は1957年創業の「ショッピングストア今川」だけが残る。



なっている。その役割の重さを実感しているので、八年間休まずに続けています」

二〇一九年、父母ヶ浜を見渡せる場所にコミュニティセンター「ヒースタンド」「宗一郎珈琲」をオープンしたのも、人のつながりを生む場をつくりたい、という思いからだ。店の傍らでは夕刻、たき火がたかれる。

「数多くの観光客が、父母ヶ浜を見ただけで帰ってしまうのはもったいない。たき火を前に、地元の人との交流も楽しんでほしいと思っています」

たき火は地域の活性化に力を注ぐ仲間が集う場にもなっている。

ただ、こうした活動が一元的に進められているわけではないという点で、三豊市の活動は独特だと今川氏は語る。

「三豊市には中心となる駅がなく、駅前の賑わいという概念もない。僕らの活動にも中心人物は存在せず、組織的なものでもありません。それぞれが自分のエリアで動き、必要に応じて連携する。いざという時には、全員がハブになれる。それが僕たちの一番の強みです」

今川氏はかつて賑わっていた商店街で豆腐店やゲストハウス、飲食店を立ち上げ、将来的には商店街の復活も目指している。

「商店街もまた、コミュニティではないでしょうか。徒歩圏で楽しめ、宿泊者や地元の人たちが交流でき、何かを始めたい人がそれを実現できる場所になってほしいですね。とはいえ、無理をして広げる気はありません。そこに暮らす人が、自分の毎日を楽しむのが一番大事なこと。楽しそうだと思う人は集まるし、そういう大人を目にすれば子どもたちの人生も変わると思っています」

香川県のうどん文化を 宿泊施設で伝える試み

移住者の取り組みでは、うどんを打つ体験ができる豊中町の宿泊施設「UDON HOUSE」が

興味深い。経営を担う瀬戸内ワーカーズ株式会社代表取締役の原田佳南子氏は、東京の大手企業で地方自治体の観光事業や地域振興に携わっていたが、二〇一八年、縁があつて三豊市に移転。宿の準備段階で重要な役割を担っていた流れから運営にも携わることになった。

「讃岐うどんの文化を宿泊を通して伝えるのが私たちの目的で



築70年を超える古民家を活用したUDON HOUSE。施設内ではうどんや調味料、ロゴ入りのグッズのほか、三豊市の地域商社「瀬戸内うどんカンパニー」が手掛けた、家庭でうどんづくりを体験できる「さぬきうどん英才教育キット」も販売している。

瀬戸内ワーカーズ(株)代表取締役の原田佳南子氏が手にするのは、サブスクリプションサービスとして発送される手打ちうどんとだしがセットになった「うどんのおうち」。休業を余儀なくされた期間もあつたコロナ禍に、安定的な事業の柱をとの思いから生まれた。



三豊市をはじめ香川県内では、讃岐うどんは日常に欠かせない存在。かつては家庭でもうどんを打っていたが、その習慣は失われつつあり、うどんの文化を学べる UDON HOUSE を地元の人が利用するケースもあるという。



地元の若手事業者が連携して2020年にオープンした「おむすび座」は、ビュッフェスタイルのおむすびとおかずを並べる飲食店。全席畳敷きで、乳幼児を含めた子ども連れがリラックスできる空間になっている。

人さんまで多くの方々にご理解いただき、皆さんに守られながら進んでいます」

体験型施設の魅力を広く発信するきっかけになったのは、国内の英字新聞での紹介記事だった。それがアメリカの放送局の取材や、国際的な信頼度を誇るガイドブックへの掲載につながり話題を呼ぶ。コロナ禍で一時は休業を余儀なくされたものの、再び活気が

戻ってきている。

農園での収穫体験や、地元うどん店の食べ歩き等のプログラムと共に印象深かったのは、移住者である原田氏が地域の人を結ぶ橋渡し役になったという話だ。

「私は広く多くの仲間の力を借りていましたが、合併後も七つの町は独自性が強かったせいか、飲み会の席などで、過去のしがらみがない自分が仲介役になっているのに気付き、三豊市でのコミュニケーションの必要性を感じました。昔話やうわさ話ではなく、自然と未来を語っていたのですが、結果的にはこうしたコミュニケーションの取り方が、今の三豊の文化になっているような気がします」

原田氏は、地域に携わる人材を増やすことを目指して、二〇二〇年に会員制シェアハウス「瀬戸内ワークレジデンスGATE」を開業。二〇二二年には、地元企業を中心とした一八社が関わる市民大学「暮らしの大学」も開校した。GATEは関係人口(注3)のコミュニティ、大学は地域の学びのコミュニティとしての役割を担っている。

「今の私たちの活動が本物なのかどうか判断する一つの基準として、『仕事がないために仕方なく離れていった人たちがまちに帰ってくるかどうか』という観点があると思います。実際、わずかながらも若い世代にそういう変化が見られており、あらたな風が吹いている感覚があります」

移住者が担う移住促進と地域のひととの橋渡し

南東部の財田町では、イターンとUターンの移住者が連携して、地域の移住促進事業を担う。二〇一九年に誕生した「財TURN*」だ。



「法人就農は効率的に動ける、新しいことにチャレンジしやすいといった利点があり、私自身はより多くの方におすすめしたいと思っています」と話す、財TURN*の橋本純子氏(左)と、橋本氏が農業に従事するアンファーム代表の安藤数義氏(右)。アボカドやマンゴーはアンファームの主力生産品。



実際にイターンした一人でもちづくり推進隊財田の理事を務める橋本純子氏は、新規就農のため二〇一五年に大阪から財田へと拠点を移し、地元の果樹園「アンファーム」でアボカドやトロピカルフルーツの栽培にいそしむ。

(注3) 関係人口/移住した「定住人口」でも観光に来た「交流人口」でもなく、地域と多様に関わる人々のこと。

「何かあったときに誰かに助けてほしいと言える場所やコミュニティが、財田には残っているように思えます」と話す、財TURN*の石井章弘氏。東京から故郷に戻った後、ペットである羊と共にゆくりと時間が流れる暮らしを営んでいる。



「社会人向けの農業スクール『AIC（アグリイノベーション）大学校』で学んだ際、財田で研修を受けてご縁が生まれたのがきっかけになりました。AICの卒業生が私を含めて五組移住しているのですが、私たちには休耕地を活用した農業を営みたい方々の誘致やサポートをより積極的に進めたいという思いがあり、それが財TURN*の設立につながりました。これまでの農業は個人経営が基本でしたが、自分のような法人就農を含めて多様な農業への携わり方があることも伝えていきたいですね」

三豊市では旧七町にそれぞれ、自主的に地域のために活動する「まちづくり推進隊」があり、財TURN*はNPO法人「まちづくり



2013年に立ち上がった財田の地域自主組織「財田の農業を考える会」では、地域住民と移住者との交流会を定期的に開催してきた。（写真提供：財TRUN*）



三豊市に着任した地域おこし協力隊が任期終了後、古民家を活用して始めた「Café 李（カフェトキ）」も、集いの場所の一つ。（写真提供：財TRUN*）

「財田町はもともと地域活動が活発で、今も定期的なスポーツ大会が行われています。コロナ禍を経て地域のコミュニケーションは薄れていくかもしれませんが、推進隊の理事も務めているため、財TURN*と推進隊を結ぶ役割も担っている。」

「財田町には大型の量販店やアパートのような集合住宅がなく、決して利便性に優れているわけではないが、橋本氏は地域の魅力を感じています」

「自分にとっては人も景色も素晴らしい場所です、居心地が良い。地元の方はあまり感じていないのかもしれませんが、昔からお遍路さんが行き来するのが日常だったおかげか、よそ者を優しく受け入れる文化があるような気がします」

その言葉に、石井氏は照れたような表情で目を細めた。

「移住先として、強くおすすめするわけではありません。財田町に来てみてはいかがですか？ ぐらいいの思いますが、移り住んだ方々が喜んでくださる町で自分が生活しているのは嬉しいことです」

推進隊財田」に属する形になっている。市からは交付金が出るものの、申請や報告といった煩雑な事務作業は、まちづくり推進隊の事務局が行うことで財TURN*は活動に専念でき、自由度は高い。

石井章弘氏は、東京での会社勤務を経て故郷に戻り、現在は、一度は耕作放棄した果樹園の再生を行っている。Uターンした一人では推進隊の理事も務めているため、財TURN*と推進隊を結ぶ役割も担っている。

財田町の道の駅「たからだの里さいた」には、特産品の販売所や飲食店に加え温泉施設があり、多くの来訪者で賑わいをみせる。



四国霊場八十八ヶ所の第七十番札所となる豊中町の本山寺。四国霊場の中で五重の塔を有するのは、この本山寺を含めた四寺。三豊市内にはほかに三野町の弥谷寺、山本町の大興寺を含めた三寺が札所になっている。



JR 詫間駅に立つ三豊市観光交流局では、レンタルサイクルのサービスに対応。三豊市には坂道が多いことに配慮し、電動アシスト自転車も備えられている。

民間事業者の 連携が生んだ 地域内循環ビジネス

もとからの住民と移住者との融合が実を結んだプロジェクトとしては、二〇二一年に詫間町に開業した宿泊施設「URASHIMA VILLAGE」が最たる存在だ。名称は、宿が立つ庄内半島に残る浦島太郎伝説に由来する。

「運営する瀬戸内ビレッジ株式会社は、前述の今川氏、原田氏のほか交通、建築、家具製造など三豊市内の一一の事業者が株主として名を連ねているだけでなく、それぞれに関係する業務を担っています」と話すのは、代表取締役の古田秘馬氏だ。

「一社では不可能でも、連携に



「三豊市では起業した高専生をはじめ、次の世代も動きだしていますが、必ずしも僕らと同じようなことをやる必要はない。選択肢があり、自分のやりたいことを口に出して挑戦できる自由が重要だと思っています」と語る、瀬戸内ビレッジ(株)代表取締役の古田秘馬氏。

大きく窓が取られ、広々としたつくりでくつろげるURASHIMA VILLAGEの宿泊棟。地域の木材の活用や事業者の連携が地域の活性化をもたらしていることなどが評価され、URASHIMA VILLAGEは2021年度ウッドデザイン賞農林水産大臣賞を受賞した。



より地域内でもこういうプロジェクトができるという、地域内循環ビジネスのモデルになってほしい。コストが抑えられるので利益が出やすい、という利点もあります」

約二〇〇〇坪の敷地に立つ三棟は一棟貸しで、客室からは瀬戸内の美しい景色が望める上、広いビーチを独占できるが、収容数は最大二三名とさほど多くない。

「これからの時代は、不特定多数ではなく特定の方々を狙うべきだ」というのがわれわれの考え方。目的を持って来てもらう。逆に言えば、目的を持ちたくなるようなも

の、ことをいかにして生み出すかが重要だと思っています」

古田氏は、地域や企業のプロデューサーとして全国で数多くの成功事例を手掛けてきたヒットメーカーだ。二〇一六年に三豊市で講演を行ったのがきっかけとなり、現在はこの地にも関わっている。

「市役所の職員も民間企業の方も、世代を超えてフットワークが軽く、先入観を持っていないかったのに感化されました。なにか特化した産業があったわけではなく、ゼロからつくっていきける非常に自由な環境も魅力でしたね」

この数年で延べ約七〇〇のプロジェクが生まれたと話す古田氏

三豊市の有人離島の一つである粟島^{あわしま}には、日本初の海員養成学校が1897年に誕生。学校が廃校となった後には「粟島海洋記念館」として施設や船舶機器等が大切に保存されている。(写真提供：一般社団法人三豊市観光交流局)



粟島には、亡き人への思いをつづった手紙など届け先不明の郵便物を預かる「漂流郵便局」もあり、広く全国から来訪者がある。(写真提供：一般社団法人三豊市観光交流局)



日本で訪れるべき桜の名所として、アメリカの大手新聞に大きく取り上げられた「紫雲山」。桜の木々がカビの一種である「てんぐ巣病」の感染に見舞われたものの、伐採や剪定など景観を守るための対策が進められている。

(写真提供：一般社団法人三豊市観光交流局)

は、UDON HOUSEや暮らしの大学の発案など、種火となるさまざまなアイデアを次から次へと繰り出してきた。

各地域で一人ひとりが自助に取り組む、市役所が陰ながら公助で支える中、古田氏が未来に向けて打ち出したのが「ベーシックインフラサービス」という共助の考え方だ。健康、教育など暮らしに関わる幅広いデータを連携させ共有化することで効率化を目指すプロジェクトで、ドイツのシユタットベルケ（インフラ関係の自治体所有の公益企業）の仕組みをもとにした先進的な取り組みだ。

官民それぞれが誇りを持てる地域づくりを目指す

「三豊市として合併した旧七町にはそれぞれの歴史や文化がありま

すから、無理やりまとめるのではなく、時間をかけて文化的に一つになるのが自然な流れ。今は多極分散型ネットワークというまちづくり方針を掲げ、そのもついでに連携していくかを考えています」



三豊市三野町の「津嶋神社」(写真左)は、江戸時代から子どもの守り神として知られる。通常は橋の手前の遙拝所での参拝になるが、1年に1度2日間だけ、本殿がある津島へ渡ることができる「夏季例大祭」の際には約10万人が訪れる。



周辺を山に囲まれた財田町の景色。「毎日、同じ道を行き来しても、そのたびに山の表情が違って見える。眺めていて飽きません」と、都市部から移住した財TURN*の橋本純子氏はこの地での生活の喜びを語る。

三豊市として合併した旧七町にはそれぞれの歴史や文化がありま

すから、無理やりまとめるのではなく、時間をかけて文化的に一つになるのが自然な流れ。今は多極分散型ネットワークというまちづくり方針を掲げ、そのもついでに連携していくかを考えています」



URASHIMA VILLAGEに隣接する詫間町の鴨之越の浜(写真中央)は干潮時に浦島神社がある丸山島(写真左)に渡ることができる。